

獅子文六全集



朝日新聞社

獅子文六全集 第十一

全十六卷／第十四冊

八百

昭和四十四年六月二十日印刷發行

著者 獅子文六

装幀 芹澤銑介

發行者 大田信男

印刷所 凸版印刷

發行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

第十一卷／目次

広い天

一

ほおじろあっちゃん

一〇八

八幸会異変

一三三

風流親日トリオ

一四〇

呑気族

一四八

あどわ・でかめろん

一六四

愛の陣痛

一六九

昭和孝子伝

一七六

愚弟は愚弟

一八七

海景異彩

一九五

ホルモン奇談

二〇三

楽園の春

二〇八

新興花見風景

二二

コント・ノンキナアル

二五

金髪日本人

二九

仇討三鞭風呂

三〇

巷に歌あらん

三三

久里岬土産

三四

四月の蕾

三五

桜会館騒動記

三六

羅馬の夜空

三六

人種・人種・人種

三六

座席を温めるな

三七

明治正月嘸

三七

仁術医者

三八

靈魂工業

二八六

探偵女房

二九八

鼻

三〇六

男の友情

三二三

ライスカレー

三三三

芸術家

三三一

日本鼯鼠

三四六

松の一番

三五〇

天は晴れたり

三六三

先見明あり

三七二

初春米搗男

三八二

豪傑

三八五

団体旅行

三九六

今年の春外套

四一四

断髪女中

四二三

胡瓜夫人伝

四三四

夏の餅

四四五

桜桃三壘手

四五六

好漢奇癖あり

四六九

われ過てり

四七八

ホントの話

四八八

写真

四九九

売家

五〇四

將軍鮎を釣らず

五一四

西貢まで

五三六

広い天

—

「おかあさん、くたびれたの？」

と、新太郎が話しかけた。母親が、さっきから、すこしもものをいわずに考えこんでいるからである。

「いいえ」

母親は、はっきりと答えたが、なんだか元気がなかった。

しばらくたつと、新太郎は、また心配になってきた。

「おかあさん、気持ちがわるいんじゃない」

と、顔をのぞきこんだが、母親は、なんにも答えずに、首をふった。

「そんならいいけど……」

といったが、新太郎は、やはり、気がかりで、よごれた

モンペをはいて、じかにゆかの上にすわっている母親のすがたを、いつまでも、ながめていた。

そこは、東京渋谷区のB国民学校の教室だった。一昨日の五月二十五日の空襲で焼けだされた人たちが、おおぜい、この学校へ避難していた。新太郎の家も、新太郎のかよっていた国民学校も、その晩に焼けてしまつて、区の子のこんな遠くの学校へきているのだつた。そして、ゆうべはここで送つたのだが、学校の教室にとまるなんて、新太郎は生まれて始めてだつた。貸してもらつた毛布を、ゆかの上にしいて、母親とならんでねた。前の晩ちつとも眠つていないので、新太郎はぐうぐういびきをかいたが、母親は、五十人も人が、いっしょなので、さわがしいばかりでなく、いろいろのことを考えて、ようにねつかれなかつた。

空襲の晩のことを考えると、まだ一日しかたつていないのに、まるで夢のような気がした。小さな家ではあつたが、あんなに早く簡単に燃えてしまったことが、うそじか思われなかつた。今でもあの家はまだちゃんとたつていて、父親の洋服戸棚や、新太郎の机や本箱や、母親のミシンなどが、へやに残つてゐるような気がした。

母親は、それでも、家や道具が焼けることよりも、新太郎の体を、いちばん心配して、近所が燃えだすと、だれよりもさきににげだした。いったい、新太郎は臆病な子ども

で、乱暴な友だちやおぼけの話が大きらいだったから、母親は空襲のおそろしいありさまを、なるべく見せないようにしたのだった。しかし、新太郎は、それほど空襲がこわくなかった。乱暴な友だちに追いかけられる時の方がよほどおそろしかった。エレクトロン焼夷弾が、電気花火のような、まぶしい光りをはなつて燃えるのを見て、

「すごいなあ」

と、感心したように立ちどまって、母親に何度もしかられた。

そんなふうには、いそいでにげだしたから、ほかの人のようにたくさんの荷物は持ちだせなかった。また、持ちだしたすこしの荷物のうちにも、いらぬものがたくさんあった。たとえば、母親は柱時計を持ちだしたつもりで、紙くずかごを手にはぎっていた。あんな時には、人間はずいぶんあわてるものである。

新太郎は、それでも、ふだん母親にいわれていた学用品だけは、忘れずに持ちだした。それから、かれがいちばんたいせつにしている青貝のナイフも、ポケットへいれてにげだした。

青貝のナイフというのは、柄のところに、青いような、紫のような、また紅いような、つまり虹のような色をした貝を、草の模様には切り抜いて、はめこんであつた。

「おとうさん、これ、なんです？」

そのナイフを始めて見た時、新太郎は、なんでできてる細工かわからなくて、父親にきいた。

「らでん、というのかな、青貝細工だよ。西洋でも、そんなものができるとみえる」

父親はそのナイフを、洋行がえりの友人から、みやげにもらったのだった。新太郎はひとめ見て、それがほしくてたまらなかつたが、父親はなかなかうんといつてくれなかつた。形は小さくても刃がとてもよく切れるので、子どもにはあぶないと思つたからであらう。

だが、新太郎は、少しもあきらめなかつた。なにか機会があると新太郎は青貝のナイフ（かれはそれにそんな名をつけた）を父親にねだつた。

「ぼくの鉛筆けずり、こわれちまつたから……」

新太郎は、そんなうそまでついた。

ところが、かれの望みが、一度にかなう日がきた。

「新太郎、あんなにほしがつていたから、このナイフをやるよ。そのかわり、おとうさんのるす中は、おかあさんのいうことを、よくきくんだぜ」

父親にそういわれた時に、新太郎は飛びあがるほどうれしかった。しかし、また、なんだか悲しい気もした。父親がしばらく家へ帰つてこないことが、わかつたからである。

父親は新聞社の写真部につとめていた。そのために、陸

軍の報道写真班員として、南の戦線につれていかれることになったのである。新太郎がナイフをもらったのは、出発の前の晩に、一家三人で、おわかれのごちそうを食べた時のことであつた。

それは、去年の一月のことで、新太郎は十二になったばかりだつた。父親がいなくなつたとうざは、ちよつときびしかったけれど、じきに母親とふたりぐらしの毎日に、なれてしまつた。そして、最初に父親からとどいた手紙や写真で、南の国のめずらしいようすを知つて、とてもおもしろく思つた。そういうところで、兵隊とはまたちがつた働きをしてる父親が、とてもえらく見えた。

ところが、二、三度手紙がきたきりで、父親の通信が、ぱったり絶えてしまつた。母親が心配して、新聞社へ聞きにいくと、新聞社の方へもまるで連絡がなくなつてるということだつた。

それから、もう一年近くなるが、父親のゆくえは不明だつた。

「田山（新太郎の姓だつた）のおとうさん、捕虜になつたんだ」

学校で、そんなことをいう友だちがあつた。

「うそだい、捕虜になんか、なるもんかい」

気のよい新太郎も、その時は、まっかになつて、むかつていった。しかし、心のなかでは、友だちのいった言葉

が、クレヨンでかいたように、色こくしみついて、消えなかつた。

家へ帰つた時に、そのことを母親にきいて、ほんとかどうか、知りたくてたまらなかつた。でも、口へだそうとすると、なんだかおそろしくなつて、今までに、一度もきいてみたことはなかつたのである。

*

新太郎は、そういう気のどくな少年なのであるが、こんどまた戦災にあつて家を焼かれ、国民学校の教室で、寝起きするような運命になつたのである。しかし、戦争のおかげで、新太郎よりももっと気のどくなめにあつた少年も、日本には、たくさんいるであらう。

ところで、新太郎は、さっきから母親の元氣のないようすを見て心配でならなかつたが、そこへ、区役所だか町会だかの人が、

「みなさん、むすびを配給しますよ」

と、さけんでまわつた。

新太郎は、朝からおながすいてたまらないところだから、すぐに、もらいにいって、母親とふたり分の四つのむすびを、両手のでのひらにのせてきた。

「おかあさん、あつたかいおむすびだよ。もう二つずつ、くれるといいんだがなあ」

と、母親の前にさしだした。

「まあ、まっ白な、おいしそうなおむすび……。でも、かあさんは、乾パンがあるから、あんたにみんなあげるわ」

母親は、そういつて、にぎりめしに手をださなかった。

「ぼくひとりじゃ、つまんないや」

新太郎がしきりにいうので、母親もやっと一つだけにぎりめしを食べることになった。

「遠足みたいだね、おかあさん」

「そうね、あんたが一年生の遠足の時には、かあさんもししょについていつて、井ノ頭でお弁当を食べたわね」

母親は、その時始めて、わらい顔を見せたので、新太郎はうれしくなった。しかし、それは五分とつづかないうれしさだった。

「新太郎……」

母親はいつもとまるでちがった、強い、そして沈んだ声で呼んだ。

「なに」

「かあさんも、ゆうべからずいぶん考えたんだけれどね……。もう、これでは、とてもふたりでくらししていけないと、思つてね」

母親の声は、だんだんよわく、泣き声のようになってきた。

「……なにもかも、焼いてしまったし……。男の人は壕舎をたてて住むといつて居るけれど、あたしたちには、とても

そんな力はないし……」

「だって、いつまでも、ここにいればいいじゃないの」

「いいえ、ここは一時で、そう長くは住めないの。それに、東京がこんなに焼けてしまつては、これからいよいよくらしが苦しくなつて、あんたがあんまり、かわいそうだから、思いきつて、あんたはおとうさんのいなかへいったら、どうかと思うの」

「おかあさん、いっしょにいかないの」

「ええ、あたしもいけるといいんだけど……」

母親は残念そうにいつた。母親が父親のいなかの人たちとあまり仲がよくないことを、新太郎も知つていた。

「ぼくひとりで行くの。そんなの、つまんないや」

「かあさんだって、あんたひとりで行りたくはないわ。おとうさんが帰つておいでになるまで、どんなことがあつても、ふたりでくらししていこうと思つたんだけれど……」

といつて、母親は涙をふいた。学童疎開の時も、母親は新太郎を手ばなさなかつたほどであつた。たつたふたりの家族であるから、ひとりへれば、あとはひとりになつてしまふ。ひとりだけで人間がくらすことは、さびしいばかりでなく、家とか家庭とかいふものがなくなつてしまふことである。どんな家でも、家というからには、ふたり以上の人間が住むのがあたりまえである。新太郎とわかれると、家というものをもつことができないから、母親はたいへん

悲しかった。しかし、こんどの空襲で、すべてのものを焼かれ、命からがらこの国民学校へにげてきて、母親はもうこれからどうしていいか、まったくわからなくなった。どこを見ても焼野原の東京で、新太郎とふたりで生きていくことは、とてもむづかしいと思った。食べるものがなくて、新太郎に苦しい思いをさせるよりも、まだふたりが別々になって、戦争のすむのを待つ方がいいと考えた。

「いなかへいけば、食べるものもたくさんあるし、おじいさんだって、あんたなら、かわいがってくださるでしょうから、きつとあんたのためにいいと思うの。そのうちには、戦争もきつとすむわ。そうすれば、おとうさんも帰っておいでになるから、また三人で前のようにくらししていけるにちがいないわ」

母親は、新太郎をはげますようにいった。

だが、新太郎はなかなか承知しなかった。

「戦争がすむと、おとうさんはきつと帰ってくる？」

「ええ、きつとよ」

「でも……おとうさんは捕虜になつてるんじゃない？」

新太郎は、心のそこで思っていたことを、ふと、口に出してしまった。すると、母親は、はつとおどろいた顔をして、しばらく何もいわなかった。きつと母親もそういうことを、心のそこで考えていたかもしれない。しかし、母親はやがてしつかりした声でいった。

「いいえ、けつして、そんなことないわ。おとうさんは、ゆくえ不明になっただけで、山奥なんかで、きつと生きていらつしやるわ。だから、ちつとも心配しないで。それよりも、あんたはじぶんの体をじょうぶにするために、いなかへいかなければいけないわ。そして、もつとしあわせな子どもにならなければいけないわ」

と、しきりに母親にいいきかされて、新太郎も、いやとはいわれなくなったが、最後に一つだけ気にかかることがあった。

「でも、かあさんは東京にのこつて、どうしてくらししていくの？」

「それも、心配しなくていいの。かあさんは、知合しあひいのおうちで働かせてもらつて、ちつともさびしくなくくらししていくわ」

そういわれると、もう新太郎は、いやだけれど、いいつけにしたがうほかはなかった。

＊

その翌日の午後、新太郎は、とうとう東京を出発することになった。母親は新太郎に旅じたくをさせたが、着るものはおおかた焼けてしまったので、持っていくものは少なかった。食べるものは、にぎりめしと乾パンと、母親が一はこだけとおいたキャラメルだけだった。そんなものを学校かばんにいれて、水筒すいじょうといっしょに肩からかけ

た。

「これをなくなすと、迷子^{まご}になるから、気をつけなくてはだめよ」

母親は、いなかにいる新太郎のおじいさんにあてた手紙を、新太郎にわたした。その表に、新太郎の行先が、下車駅の名まで、こまかに書いてあった。いなかは広島県のある村で、父親の両親が農業をしてるのが、新太郎はまだ一度もいったことがなかった。おじいさんは三年ほど前に東京へでてきて、顔を知っているが、ずいぶんこわい顔の人だった。おばあさんはまるで見たことがなかった。

「かあさんも、働くおうちがきまったら、すぐいなかへ知らせるから、あんたも、すぐ返事^{へんじ}をくれるのよ。それからのちも、手紙だけは、忘れずに書きましようね。そのうちに、じきに日がたって、また、いっしょに住めるようになるわ」

母親は、そのことを、くりかえしていった。

東京駅を汽車がでるのは、夜であったが、とても混雑するので、昼すぎから駅へいって、ならばなければならなかった。ただ、切符だけは、罹災^{りさい}証明書を見せれば、買わなくてもよかった。

「これを見せると、日本じゅう、どこまでもいけるの？」

新太郎は、母親にきいた。

「ええ、そう」

「おもしろいな」

なにかも心ぼそいなかにも、それだけは、ちよっとおもしろい気がした。その紙きれが、魔法のじゅうたんのような力があるように考えられた。そのことを母親に話すと、汽車だけはどこまでも乗れても、食べるものとねるところがなければ、旅行はできないといわれて、新太郎はつまらなくなった。

東京駅へいくと、ここも空襲をうけて、赤煉瓦^{あかれが}の建物が、ぼろぼろくずれそうに、焼けこげていた。

「まあ、東京駅がこんなになって……」

母親は悲しそうな声をだしたが、それよりもホールのかにあふれた人たちの方が、はじめなありさまだった。おかたは罹災者ばかりで、よごれた着物をきて、それぞれ大きな荷物をもって、ぼんやりと立っていた。

「こんなおおぜいの人なのに、あんた、乗っていける？」

母親は心配になって、もう新太郎をいなかへやるのをよそうかと、思ったほどだった。

「だいじょうぶですよ」

新太郎は、いなかへいかなければ母親がこまるだろうということばかり、考えていた。

そのうち、切符をきり始めた。見送り人は、いっさいなかへいれてくれなかった。母親は改札口のところまで、ついてきた。

「じゃあ、気をつけてね」

母親の声がきこえたが、新太郎は後から押す人につきとばされそうになって、返事ができなかった。

「きつと、手紙をくれるのよ」

ふりかえると、人ごみの間から、ちらりと母親の顔が見えた。新太郎は、その時、急に悲しくなつて、

「ええ」

と、大きな声をだそうとしたのに、言葉が喉につまつて、とても母親にきこえそうもなかった。

二

日本人は家のなかにいると、行儀がいいが、往来にでたり、乗物に乗る時には、人の迷惑なぞちつとも考えない野蛮人になってしまう。戦争になってから、そのわるいくせがいよいよはげしくなったが、新太郎が汽車に乗りこむ時も、けんかよりひどいありさまだった。

新太郎の小さな体は、必死になつて押すおとなの間にはさまれて、卵のようにつぶされかけた。

「いたいよ」

思わず、大きな声をだしたが、だれもきいてはくれないかった。もう死ぬかと思つたが、そのうち、急に体がらくになった。見ると、新太郎を押しのけたふたりの男が、あら

そつてせまい入口にはいろうとして、両方の大きな荷物がつかえて、もがいているのである。そして、おたがいになる口をいい合っているが、新太郎は小さいから、荷物の下をぐりぬけたら、とてもらくらくと、車内へはいつてしまった。おとななんて、ずいぶんばかなものだ、新太郎は思った。

早く車内へはいれたから、新太郎は窓のそばの席へこしかけることができた。しかし、見るまに人が乗りこんできて、通路までぎつしりとうずまつてしまった。この列車は大阪行きで、戦争がはげしくなつてから、東海道線では、いちばん長距離の列車だから、それでこむのかもしれないかつた。そして、もっと遠くへいく人は（新太郎もそのひとりだが）、みな大阪で乗りかえねばならなかつた。

大阪へつくのは、昼まえと聞いていたが、何時であるか、新太郎は知りたくなかつた。

「おじさん、この汽車は、大阪へ何時につくんですか」

新太郎は、前にこしかけてる男にきいた。

「わからん」

その男は、それだけしか答えなかつた。おとなのくせに、それくらいなことを知らないのかと、新太郎はおかしなかつた。すると、その男は、

「このごろの汽車なんて、よっぱらいのようなものだ。何時に家へ帰るか、じぶんだって知らないんだ」

と、ひとりごとをいって、窓へ首をよせると、じきに眠りはじめた。

なんだか、へんな人だと思って、新太郎は、その男の顔をよく見た。年は新太郎の父親と同じくらいだったが、顔がとて長く、馬のようだった。そして、もう十年も床屋へいかないように、髪をのばしていた。色も黒く、口ひげも黒かった。ほかの男はみんな国民服のようなものを着ているのに、その人だけは、背広を着ていた。でも、あまり上等の洋服ではなかった。そして、この人も新太郎と同じように、荷物らしい荷物を持っていなかった。ふろしき包み一つだけだった。

(なんだか、気味のわるい人だな。悪漢かもしれないぞ)
新太郎は、心のなかで、そう思った。そしてもう口をきくのをやめようと思った。

*

汽車は、暗やみのなかを走っていた。

毎日のようにB29^ががくるので、どこも燈火^{とうか}を消していい。停車場さえも、ほんのすこしか電燈をつけていないので、なんという駅へとまったのか、標字も読めなかった。列車のなかも、人の顔がぼんやり見えるくらいな、暗さだった。

そのうちに、まわりの人は、ぐうぐう眠りはじめた。新太郎もねようと思ったが、ちっとも眠れなかった。そし

て、急にさびしくなって母親のことを思いだした。

母親はいまごろ国民学校の床板^{どいた}の上に毛布をしいて、ねているにちがいないと思った。母親もひとりになって、さびしいだろうと思った。でも、よその家で働けば、母親はもう買出しや行列なぞをしなくてもすむと思った。新太郎の食べるもののために、母親がどれだけ苦心をしていたかということ、新太郎もよく知っていた。そして、買出しなんかにはいかにように母親にたのんだこともあった。それでも母親は遠くまで、さつまいもやうどん粉を買いにいった。力もないのに、いつも重い大きな荷物をしょって、へとへとになって帰ってきた。

(いいおかあさんだなあ、いつになったら、またいっしょにくらせるのかなあ)

新太郎は、さっき別れたばかりの母親のことを、もうそんなふう考えた。そして、戦争がすむまでは、いっしょにくらせないと思うと、がっかりした。

新太郎は、それから、まだいったことのない広島県のいなかのことを考えた。おじいさんは気むずかしい人だと、母親から聞いていたが、そんなことはあまり心配ではなかった。それよりもいなかの子どものことが、いちばん気になった。疎開^{そかい}からかえった友だちは、いなかの子どもが東京の子どもをいじめるといった。

(なんにもわるいことをしないのに、いじめるなんて、ま

ちがつてる)

新太郎は、その話をきいた時に、とてもくやしがつた。でも、こんどはじぶんがはじめられるかもしれないのだ。そんなところへいくのがいやでいやで、たまらなくなつた。

そんなことばかり考へてるものだから、新太郎はいつまでたつても、眠れなかつた。汽車が暗やみのなかを、ごうごう音をたてて走つてゐるのが、とても心ほそかつた。そして、きびしいのをまぎらせるために、ポケットから母親にもらつたキャラメルをだして、食べはじめた。

ついでに、新太郎は、上着のポケットに隠れた五十円のお金と、右側のポケットに隠れた母親の手紙とを、上からおさえてみた。両方とも、たしかにはいつていたので、安心した。お金はこれからたいせつであるし、また手紙の方は、表にいなかの所書きが書いてあるし、二つともけつしてなくさないように、母親から何度も注意されたことを思い出したからであつた。

安心した新太郎は、二つめのキャラメルを食べた。半分とけかかつたキャラメルだが、ひさしぶりなので、とてもおいしかった。母親は新太郎の誕生日のために、このキャラメルを高いお金をだして、どこからか買ったのだそう。そして、誕生日のこないうちに、家は焼けてしまい、母親とも別れなければならなくなつたのだ。

また、新太郎が母親のことを考へてゐると、ふいに、「うまそうなものを、食つてゐるな」

と、向う側のさっきの顔の長い男が、いつか目をさまして、話しかけた。新太郎は、その男を悪漢ときめていたから、なんとも返事をしなかつた。

すると、その男は、

「ぼくにも、一つくれんか」

と、大きな手をだした。

なんて、いじのきたない男だろう。おとなのくせに、子どものもつてるキャラメル——それも、今はとても貴重なキャラメルをまきあげようなんて、ずいぶんいやしい男だと、新太郎はしゃくにさわつて、たまらなかつた。しかし、いうことをきかなければ、悪漢はどんなひどいめにあわすかもしれない。新太郎は、だまつて、キャラメルのはこを、その男の方にさしだした。

ところが、その男は、あつはつはと、大きな声でわらつて、

「うそだよ、ぼくはキャラメルより、この方がすきなんだ」

と、いいながら、ポケットから、たばこをだして火をつけた。そして、まっ黒な口ひげの下から、もくもくと、煙をはきだした。

新太郎は、いよいよへんな男だと思つた。キャラメルが

きらいなら、はじめからくれなんていわなければいいのに――

「君は、りこうそうな顔をしてるな」

また、その男が話しかけた。新太郎は、返事をしなかった。

「級長だろう？」

と、その男がいった。新太郎は、とてもおどろいた。なぜといて、新太郎はほんとに級長なのである。よくあてたものだと思つて、

「ええ」

と、返事をしてしまった。

すると、その男は、

「級長になつたつて、得意になつちゃだめだぜ。級長なんて、ほんと、ばかが多いからな」

それを聞いて、新太郎はとても腹がたつた。いままで、級長をしてるのをほめられたことはあつても、わるくいわれたのは始めてだつた。すっかりしゃくにさわたつたので、新太郎は返事をしないで、ねたふりをした。そして、いつまでも目をつぶっていると、ほんとにねてしまった。

*

ゆうべは、おそろしかった。

新太郎が、うとうととねていると、人声と物音で目をさました。車内の人はみな立ちあがっていた。

「空襲だ、空襲だ」

「飛行機が、頭の上に来ている」

そんな声が聞えた。汽車は忍び足であるくように、ゆっくり走っていた。やがて、がたと音をさせて止まった。

「みなさん、あわてないで、順に車をおりてください。そして、なるべく列車をはなれて、退避してください」

と、車掌しやうしやうがふれあるくと、お客たちは青い顔をして、うろたえた。なかには、荷物を全部もっておりようとする者もあった。車の出口はたいへんな混雑だつた。しかし、荷物の少い新太郎と、あの顔の長い男とは、身軽に、外へ飛びおりた。

まだ夜が明けないで、外はまっ暗だつた。畑だか、野原だか、ちつともわからなかつた。だれか新太郎の手をひいてくれたので、その人といっしょに、むちゅうで土の上をあるいた。

「このへんなら、まあ安全だろう」

だいぶあるいてから、その人は地面の上へすわつた。

「心配するんじゃないよ。キャラメルでもだして、食べるといい」

その声で、新太郎は、さっきの顔の長い人だとわかつた。暗やみのなかで、そんな男とふたりきりすわつてゐるのは、とてもこわかつたが、その時どこかで、ぴかっと電光のようなものが光つて、つづいて、高射砲の音が聞えた。